

3,500パック、62年計画 1.5ha 4.0t 約8,900パック 出荷先 京浜70%、京阪神20% 広島10% 出荷期 9月20日～10月末。おもに水田利用……以上

上記の回答から、こんど私が食べたヒシは、おそらく三橋町農協から出荷されたパックの1つと考えられるが、佐賀県や静岡県下でも、中国産のコウモリビシ系(?)を最近栽培し、出荷されているようなので、今後ますます全国的に生産地が増加するに違いない。

さて、ヒシの果実(核果)を分類学的にみると、従来日本には4刺があり、果径2～3cmのヒメビシから進化して、4刺があり果径4～5cmあるオニビシのなかま、2刺をもち、果径3～4cmあるヒシの3種類が在来種である。大東亜戦争中および戦後は、2刺があり果径5

～6cm、紅紫色で1個が20～25gもあるトウビシ *Trapa bispinosa* Roxb. が、最近再び筑後平野や佐賀平野のほか濃美平野でも戦前より盛んに栽培されている情報を聞いている。筑後市在住の益村聖先生は、クリーク農業地帯でヒシの多産する農家で、曾ては夕食の代りにヒシを食べるなら夜なべが免除されるほどであったという。

最近のイネの減反政策に伴い、イネに変わる転作作物として、トウビシだけでなくセリやジュンサイその他、山菜となる水草類も、日本各地で大段的に生産されることだろう。

終わりに、ご協力いただいた祝原道衛・益村聖両先生・福岡県園芸連の企画推進部野菜課およびトウビシを提供くださったHさんに感謝申し上げます。

自称自然業の登場

和知隆作

生家は第一代の開墾百姓だった。私の幼少年時代は世界的な恐慌の嵐の吹きまくるなかに置かれていた。そこへもってきて連年の不順な天候は東北の農村に一大凶荒をもたらした。そのようななかで欠食児が続出し娘が売られて行った。

それは大正の初頭から昭和の初期頃であった。世界第一次大戦が終りシベリアへの出兵・朝鮮への出兵等の歴史を経て、大正十二年九月一日の東京大震災、大正天皇の崩御、今上天皇の即位、東北の大飢饉、二・二六事件、五・一五事件、満州事変、北支中支支海南支事変を経て大平洋戦へと戦火は拡大されて行った。

その当時私は実家で父と共に農奴と寸分変わったところのない農業労働に身を投じていた。

その時に骨の髄までしみ込んだのが、大自然を足場にして生きる生き方であった。

そこで得られたものは自然の摂理にジョイントされた自然観・宇宙観・世界観・人生観であった。

その無限大のエネルギーを秘めたロマンに満ちた生き方は次に記述する。

世界第二次大戦に敗れソ連に抑留され強制労働の桎梏に苦しみ、解放され日本へ復員したのは今から三十九年前だった。復員すると休む暇もなく開拓生活が始まった。

そこは軽鬆な火山灰土(クロボク)で極めて瘦はくで

酸性の強い土質だった。アロヘンや腐蝕から構成された土質だった。日照りが続くと乾いて風で舞い上がり、水を含むと膨軟になって気水の流通が悪くなって耕土としては余り上質のものではなかった。

昔此処那須甲子高原に旧陸軍の軍馬補充部の耕地(飼料栽培地)や放牧場・採草地等があったがそこには広大な防風林が設けられ風蝕を防いでいた。

この附近一帯はススキ・イヌコリヤナギ・バッコヤナギ・キツネヤナギ・アキグミ・ナツグミ・ハギ・メガルカヤ・オガルカヤ・カリヤス・クサボケ・ハシバミ・タケニグサ・エビヅル・ウマブトウ・ノイバラ・カシワ・ハシバミ等の植生に被われていた。

更にそこにはオキナグサ・マツムシソウ・アヅマギク・ワレモコウ・ホタルブクロ・ギボウシ・ヒヨドリ・ナデシコ・オミナイシ・ヤマボクチ・カセンソウ・オケラ・ツリガネニンジン・ヤブニンジン・フウロソウ・ヤマユリ・ノカンゾウ・キスゲ・アヤメ・リンドウ・ウメバチソウ・モジズリ・スズラン・ナルコユリ、等の花も咲いていた。それは決して珍らしい花ではなかった。

又奥山の国有林(那須連山一帯)にはブナを主体とした森林がうつ蒼としていた。

そこにはトチ・カツラ・ミズナラ・コナラ・ミネバリ・ヤマハンノキ・ヤハズハンノキ・ダケカンバ・ウダイカンバ・キハダ・サワグルミ・オヒョウ・イタヤカエデ・インコウカエデ・カラコギカエデ・ヤマモミジ・ハウチワカエデ・コバウチワカエデ・ミネカエデ・コミネカエデ・ヒトツバカエデ・チドリノキ・ミツデカエデ・メグスリノキ・

ウリハダカエデ・ウリカエデ・サワシバ・チドリノキ・カジカエデ・トネリコ・コシアブラ・タカノツメ・クロベ・アスナロ・イチイ・ジャクナゲ・アオキ・ドウダンツツジ・ミツバツジ・ヤシオツツジ・ホウノキ・コブシ・タムシバ・ユズリハ・オオカメノキ・イゴノキ・ハクウンボク・アワブキ・フサザクラ・ヤマザクラ・ウワミズザクラ・シウリザクラ・マンサク・ツノハシバミ・ヤマボウシ・ナツツバキ・クロモヂ・カマツカ・アズキナシ・ズミ・オオズミ・ウラジロ・ヤシバシ・クマシデ・アカシデ・ツリバナ・ニシキギ・シラキ・ミズキ等々樹種が極めて多かった。

これらの樹種豊かな森林には形影相伴うように野鳥・昆虫・やまめ・いわな・その他の水生生物・獣類等も多く棲んでいた。

更に昔に逆ると鹿や猿が跳梁していた。正に生態系は豊かであった。当時祭等には朝早くピク（網袋・背のう・リュックサック）を背負って銃・と網・クリ竿等を携えて阿武隈川の源流へ逆ると帰途には大狸で背負い切れない程であったと。これは昔父が祖父に連れられて狸に出かけた追想である。

更に追憶は追憶を呼んで話題はつきない。那須の連山も秋の収穫がたけなわになると漸く夏緑広葉の自然林も全山錦に被われ始める。稲刈りの腰を伸しては眺めたその風景は未だに脳裡に鮮明に残っている。

お盆近くなると高原には乾草刈りが展開される。ブナ林のうつ蒼と繁る那須の麗峰も一だんと澄んだ空気の中にそびえ裾野を広げている。

暑い日中四つん這いになり田の草を取る。泥田に入り両手を熊手のようにして稲株の周辺を掻きまわす。背中は日に照りつけられる。水は湯のように沸えている。汗は滝のように流れる。稲の葉先は針のように尖っている。しばしばそれで眼を突く。眼科医にも通うようになる。やすりのようにざらざらした葉面で絶えず顔をこする。

除草を進める鼻先に突如としてやまかがし等が現われることもまれではない。俄然緊張させられる。

機械的に立っては腰を伸ばす。そのとき自づと那須山を眺めることになる。自然林に被われた那須の山客は即座に疲れをいやしてくれる。

近くの里山の林縁にはヤブデマリ・ガズミ・ノイバラ・ミズキ・ヤマボウシ・トネリコ・ガクアジサイ等の白い花が見える。よしきり・かつこう・ほととぎす・きじばと・つつどり・ほほじろ等の声がひねもすきこえて来る。蟬の声もきこえる。

とんぼ・はんみょう・ぞうむし・かみきり・くも・かまきり・しおやあぶ・ひおどし・あげは・しじみ・せせり・とんぼ等は随所にか姿を現わしていた。

以上のようなたたずまいは経済や文化・交通・産業等の発展と共にいつの間にか姿を消してしまった。

何よりも淋しいのは蟬の声を殆んどきけなくなったことである。このような自然のなり行きを見ていると全く恐しくなってくる。

レーチェル・カーソンのサイレント・スプリングが足もとにしのびよって来ていることが感ぜられる。

幼児達の行く末を考えるとどのようなことがあっても昔の自然を復元して残してやらねばならない。

緑を残すためには先づ当地方の緑を構成する樹種を知らねばならない。そのためには樹種の展示の場が必要になって来る。

既に展示の場をつくり始めてから十四年のさい月をついやすことになった。開発で粗末になる木は勿論、実生・取木・挿木・株分等で増殖育成を行い之を展示の場へ定植して来た。

育成と増殖は専ら自分の畑で行って来た。植樹よりもその管理に要する時間とエネルギーは容易ではなかった。これらの樹木はいま花が咲き実がなって訪花昆虫や野鳥が来ている。

道行く人もこれを楽しんでいる。やがては之等の樹種で防風林や自然森林公園も生れるに違いない。町や村はこの公園で包まれるようになるであろう。市内の公園ではなく公園の中の市・町・村にしたい。それは決して夢に終らせてはならない。みんながその気になれば実現は可能である。

目下展示の場は白河市と西郷村にまたがって五十数箇所展開されている。

ここまで進めて来るまでには多くの人達の支援のあったことは勿論である。

縄文・弥生の頃から農業が生れたようにそろそろこのように破壊された自然の現状から自然業（仮称）という産業が産れてもよいのではないかと考える。

今までの林業経営の形体は自然林経営へと脱皮を急ぐ必要に迫られている。私は自称自然業として自然林経営の一端を担っているものだと自負している。

近代農業はやがては有機農業とか自然農法へと移行するときに必ずくるに違いない。有機農業と自然農法とは不離一体のものでなければならぬ、と考えている。

之が実現への具体化はいま全国的に澎湃として漲っている。具体化させて見たいと思っていることを羅列して見ると：

1. 街路樹は今までの考え方から脱却して、街路林の中に街路があるという形にする。
2. 街路林の構成樹種は勿論当地域の自然の木を活用する。
3. 河川の流域には昔のように竹・ヨシ・マコモ・ガマ・やなぎ等を堤防とし生かす場があっても決して悪くはないと思う。
4. 河川敷ではなく河原にはカワラヨモギ・カワラナデシコ・カワラジッコ（オキナグサ）・カワラグミ・ツ

ルヨシ・ネコヤナギその他上流から流れてきて生える植生も再現したい。

5. 水田のかんがい期に入ると水が浸透して湿地が出来、そこにセキショウ・ホシクサ・イヌノヒゲ・イ・ウシクグ等が生える。このような場があることも望ましい。
6. 岩壁や道路の側壁にはもっとイワガラミ・クロヅル・テリハノイバラ・ツルアジサイ・イワヒバ・シモツケ・等を利用する。

実験の結果極めて効果大である。例を挙げると限りが無い。が工場緑化林や農場林は既に茨城県稲敷郡三浦村のスガノ農機工場と東村の新利根平順開拓協同農場の一画。上野満氏のところに実施中である。

散文詩 2 篇

和 泉 克 雄

あまも *Zostera marina* L.

冬は海岸で海産顕花植物のあまもの話をたのしく聞いたあじも りゅうぐうのおとひめのもとゆいのきりはずしもおぐさ <海の紐 海の帯 海のベルト>とも言うこの水草の葉基部 根茎には濃厚な甘味があり煮出すと砂糖の代用になり乾燥すると菓子代りになり蒸溜すると焼酎になりその種子には米におとらぬ栄養価があるのでやがては<海産米>としても広く栽培されるであろうが現在では海浜農家の堆肥の<つめもの>か冬飛来しては各地の海岸湖沼で越冬する白鳥らの好物として知られるぐらいのものだがそうなるにあらゆる生物から奪うのみであった人間も白鳥のように優美になるかも知れないとりゅうぐうのおとひめのもとゆいのきりはずしそっくりのひげをなでながら仙人の予言者的風貌の博士は言ったそうなるかと白鳥がからすのような憎まれものになるのではないのかと言うと否否きみの見方はいつも悲観的だよそこは人間も白鳥のように自由に飛べるようになり生態も現在よりはるかにのびのびしたものになっているなぜなら今の百分の一にも減れば人間の存在そのものが貴重になっているだろうがそのころの吾輩は<甘藷米><甘藷酒>も味わうことなく天路巡礼の旅の途上だろうと白鳥そっくりの声で愛する博士はかなしうに言った

水の妖精 *Ceratopteris thalictroides* (L.) Brongniat

冬は室内プールの水の妖精らをみるのをたのしみにした水中で輪になって花になったり音楽をかたどったりする若い妖精らの自由で自在の姿態のうごきは女の美しさのきわみであり人だけに許された神を讃える輪舞にみえた神を讃える無数の胞子が水中から空中に散ったそのとき淡い緑色にゆれる水面に愛する水草しだ科のみずわらびウォーターズプライト<水の妖精>がたちまちに繁茂したその水草を栽培し養われた日が透明な地下湖の底に映り猿猴もどきに手をのばし捉えんとする今が水面に映った薬草でも野菜でもないにんじんの葉のような水草一本が水中の観葉植物の一種としてもてはやされほうれんそう一束とほとんど同じの値でとぶように売れた時があったウォーターズプライトつくりの達人と言われた時があったおかしくもおもしろく短く狂熱的に愛された時があった 環境によってさまざまに変化するこの水草が水先案内と美しく生きるがための在り方を教えてくれた時があったその栽培技術をおぼろげながらも会得しただけで妖精を美しく繁茂させる方法をねんごろに乞われた時があった冬が最高に美しかったのは光も水温も調節できたからだ冬の室内プールの水の妖精たちがこんなにも美しいのは若くすこやかなもっとも飲びの今という水にいるからだ